Information

BOOK REVIEW『創造都市と社会包摂』

Reviewer：飯笹佐代子（総合研究開発機構 リサーチフェロー）

『創造都市と社会包摂
―文化多様性 市民知・まちづくり』
佐々木雅幸・水内俊雄
（大阪市立大学都市研究プラザ）編著
ISBN978-4-88065-220-7 C0033
定価 3,360円（税込）
水曜社 www.bookdom.net/suiyosya/

日本でも今日、多様な可能性を有する「創造都市」概念が、都市論や政策領域において定着しつつある。「創造都市」という考え方は、周知のように欧米の経験や論客から大きな影響と刺激を受けながら展開されてきているが、その日本的な受容には、ある種の「偏り」があるようにみえる。それは、経済活性化の手段としての側面のみが強調され、文化・芸術の持つ、より社会的ないしは福祉的な役割への注目度が低い、という点である。

「住んでいる人々が最大の地域資源である」という表現が示すように、creative city の提唱者C.ランドリーは、常にホームレスや移民、障害をもつ人々などの、いわゆる社会的弱者の包摂を重視しつつ、都市の再生を構想している。文化や芸術活動を通して、いかにかれらの創造力を引き出し、社会参加を促していくのかという視点が、ランドリーの創造都市論の真骨頂といってよい。「格差社会」や社会的排除の問題への懸念が広がる中、こうした観点こそ、日本での創造都市をめぐる議論にもっと反映されるべきであろう。

その意味で、本書はまさに待望の書である。かねてより創造都市の社会的側面の重要性を認識していた佐々木雅幸氏をはじめとする研究グループが、タイトルに敢えて「社会包摂」という語を掲げて、真正面からこの問題に挑んだ本書の登場は、きわめて意義深い。内容を見ると、大阪を中心に、国内外において実践されている、社会包摂に向き合うアートマネジメントの試みや、スラム、荒廃地域の改善等の事例など、豊富な具体例に基づいた問題提起がなされている。現時点では、それらの多くは個人のボランティアや市民活動によって担われており、それゆえの困難や限界も少なくない。政策論としての「公」ないしはガバナンスのあり方など、問い直すべき諸課題にあらためて気づかされる。

なお、本書では、創造都市と社会包摂を実証的・理論的に架橋するという、やや遠慮がちな表現の目的が示されているが、少なくとも政策論としては、両者は不可分かつ相補的な関係にあるべきではないだろうか。本書を皮切りに、日本的文脈に即しつつ、経済的、社会的にバランスの取れた創造都市論のさらなる展開を期待したい。

イベント・研究会の予定

各詳細は、都市研究プラザホームページでご覧ください。

10/31～11/1	小さな国際シンポジウム 「縮小都市の創造性」 …大阪市立大学 梅田サテライト等	第1ユニット
11/5～6	2009 日中科学技術交流大阪シンポジウム ～環境保護先進未来都市に向けて～ …ATC 等	第2ユニット
11/7	大阪の長屋の未来を語る市民フォーラム …文化交流センター	第1ユニット
開講中～（2月まで）	地域のためのアートマネジメント講座 後期 …船場アートカフェ 等	第1、2ユニット
11/16～21	まちのコモンズ2009 ～船場建築祭4～ …北船場周辺	第2ユニット
11/21	「ぺちゃくちゃ×Creative Stream OSAKA」 クリエイティブストリームオオサカ関連事業 …大阪市役所玄関ホール	第1ユニット
11/24	ユネスコ・デザイン都市フォーラム in KOBE …神戸ポートピアホテル	第1ユニット
11/25	阿倍野 Religion-Café …阿倍野プラザ	第3ユニット
11/28	『思いやりのまち』大阪を創ろう!! 市民フォーラム ―大阪希望館支援集会― …カトリック大阪カテドラル聖マリア大聖堂（玉造教会）	第3ユニット
1/18～22	G-COE 都市研究プラザWeek2009 …都市研究プラザ・各現場プラザ等	全ユニット

■特別研究員（若手）公募
G-COE特別研究員（若手）募集（平成22年2月募集分）
2010年1月に公表を予定しています。
詳細 ⇒ http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2010年2月です。

URP
Osaka City University 大阪市立大学 | Urban Research Plaza 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設（現場プラザ、海外サブセンター）を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
tel：06-6605-2071 e-mail：office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 冨田常雄
ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 中川 眞 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩
http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff.html

大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター 第5号 2009年11月
編集委員会 コーディネータ 蟲明眞一郎、佐藤由美、角 知子、西田貴子
http://gcoe.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/fellow.html

URP Osaka City University
Newsletter
Issue 5, Nov. 2009
大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター第5号：2009年11月

keyword's column

社会的包摂
【Social Inclusion】

欧州では、1990年代から、貧困層拡大の背景として人種、宗教、言語、教育等の違いにより社会から排除されるSocial Exclusionが問題視されてきた。その対策として、2000年にEU欧州理事会が掲げた政策理念、Social Inclusionを社会的包摂または社会包摂と呼んでいる。

まさに世紀の節目に、欧州の政策が社会的包摂に向けて一斉に舵を切った時、わが大阪も野宿者や日雇労働者問題に直面していたことが、その後の都市研究プラザの創設やグローバルCOEの採択につながった。

ところで、大阪は、かつて東洋のマンチェスターと呼ばれたが、移民を受け入れる街、東洋のシカゴであったことは意外と知られていない。商都、工都、水都、そして移民都。考えてみれば、移民都大阪に来た人たちが語り築いてきたのが今の大阪弁かもしれない。事実、釜ヶ崎では未だに大阪弁はマジョリティではない。在日コリアンや九州出身の人たちが、少々メディアの手垢にまみれた大阪弁を身につけてはいるが、これも排除されないための生き方か？ ついでに、阪神ファンになることも。ことばとメディアによって社会的包摂が自然となされる街、それが大阪。では大阪人って誰なのか？ 粉もん、おばちゃん、阪神ファン、と大阪弁的に誇張される大阪論をクリティカルに乗り越える任務が私たちにある。

水内俊雄（都市研究プラザ副所長）

In Europe, from the 1990s onward, social exclusion over differences in ethnicity, religion, language, education, etc. has attracted attention as a problem against the background of increasing poverty. The policy rationale adopted by the European Union Directorate in the year 2000 as a countermeasure to this is called 'Social Inclusion.'

The fact that here in Osaka we were confronting the problems of rough sleepers and casual day laborers at precisely the same time, just at the turn of the century, when policies in Europe changed course towards social inclusion, later led to the establishment of the Urban Research Plaza and its ratification as a Global-COE.

Osaka by the way was formerly called the "Manchester of the Orient", but the fact that it was also the "Chicago of the Orient", a city absorbing immigrants, is surprisingly not as well known. It was a city of commerce, of manufacturing, of canals, and of immigrants. If one thinks about it, the language built up by the people who came to the immigrant city of Osaka may be today's Osaka dialect. As a matter of fact, even now in Kamagasaki speakers of the Osaka dialect are not in the majority. Ethnic Korean residents and people originally from Kyushu have to some extent made the Osaka, which permeates the media, dialect their own, but is this also perhaps a survival mechanism for avoiding exclusion? Subsequently, they have also become Hanshin Tigers fans. A town where social inclusion has come into being naturally through language and the media-that is Osaka. So, what makes one an Osakan? The task is up to us to critically get beyond the image of an Osaka that prides itself flour-based foods, vibrant, loquacious middle-aged women, Hanshin Tigers fans, and the Osaka dialect.

特集 1

貧困と都市再生・ソウルサブセンター開設記念シンポジウム

SPECIAL 1 "Poverty and Renewal" "Seoul Sub-center Opening Commemorative Symposium"

2009年9月17日(木)～18日(金)、ソウルサブセンター開設記念シンポジウムにあわせて、ソウル市立大学都市人文学研究所との学術交流協定の締結、大韓住宅公社住宅都市研究院(HURI)共同学術セミナーが実施された。都市研究プラザからは、教員、研究員、その他関係者合計22名が参加し、今後の研究連携の推進に向けた研究交流が図られた。

■ソウルサブセンター開設記念シンポジウム

今年度(2009年度)4月に都市研究プラザソウルサブセンターが社団法人韓国都市研究所内に設置された。これを記念して、2009年9月18日(金)にソウル市所在のフランチスコ教育会館2階・大会議室で都市研究プラザと韓国都市研究所の共催によるシンポジウムが開催された。都市研究プラザからは、佐々木雅幸所長、水内俊雄、岡野浩、両副所長をはじめ、全泓奎准教授、特任教員の櫻田和也のほか、都市研究プラザ博士研究員の米野史健、G-COE特別研究員の葛西リサ、本岡拓哉、稲田七海、福本拓、コルナトウスキ・ヒエラルド、全昌美、若松司、RAの平川隆啓、太紅梅、そして中山徹(都市研究プラザ特別研究員/大阪府立大学人間社会学部教授)が参加した。

ソウルサブセンターは、上海、バンコク、ジョグジャカルタ、ロサンゼルス、香港、メルボルンに続く7か所目の国際サブセンターにあたる。ソウルサブセンターが設置される韓国都市研究所は、都市貧困地域で現場活動を主に行ってきた「都市貧民研究所」と政策研究を進めてきた「韓国空間環境研究会」の研究者らを中心に1994年に設立された、純粋な民間の研究機関であり、その研究課題は都市研究プラザと関連するところが大きい。

「貧困と都市再生」と題された本シンポジウムでは、都市再生に付随する問題の実態分析だけにとどまらず、社会包摂・文化創造に向けた理念的・実践的な方策も提示された。それぞれの報告に対しては、研究者だけではなく、地域の実践に関わる活動家や市民など約50人近く集まった参加者から活発な質疑応答がなされ、報告者も新たな視点を考えさせられる機会になったことだろう。このほか、同行していたありむら潜氏(釜ヶ崎のまち再生フォーラム)や織田隆之氏(社会福祉法人日本ヘレンケラー財団知的障害者更生施設伯太学園)らによる、都市再生を草の根的に実践する生の声が伝えられたように、研究だけにはとどまらない実践性に富んだシンポジウムになった。

報告者による総合討論の様子

このシンポジウムを通じて、歴史的背景や政治構造の違いから、韓国と日本の都市再開発をめぐって権力側から市民にかけられる圧力は、その強度と速度の面で全く異なることが認識されたものの、都市再生および都市再開発に付随する貧困や社会的排除の状況には共振するところが大きいと思われた。すなわち、研究の側面からはこうした状況を正確に描きだすとともに、社会的包摂型の都市再生への最善の道筋を模索するよう求められるのだろうが、その際、この問題に携わる日韓の研究者相互交流が重要であろう。後半部の司会者、金ウォンベ氏(国土研究院)が指摘したように、このことは欧米の理論とは全く別物の、東アジアから発信される新たな都市論の模索に連結していくものであり、都市研究プラザとしても今後は、日韓だけではなく既に設置されている香港、上海サブセンターをベースに研究者の相互交流の必要性が確認された。そして閉会にあたり、佐々木所長からは、今年度創刊予定のＣＣＳがその重要な媒体となることが指摘された。

■ソウルサブセンター開設記念ソウル貧困地域ツアー

9月19日(土)には、韓国都市研究所の研究員の案内で「ソウル貧困地域ツアー」が行われた。

再開発地区を歩く貧困地域ツアー参加者

最初の訪問地である龍山地区は、ソウル市で展開する都市再開発事業において多くの人々が心を痛めた事件が起こった場所である。立ち退きに抵抗した５名の市民の命が奪われた龍山惨事の現場では、いまも警察官が地区を包囲しており、問題の深刻さを十分に認識することができた。続いて、一行は南九老の韓国系中国人(通称、朝鮮族)多住地区を訪問した。シンポジウムで朴世訓研究員(国土研究院)からの報告にもあったように、韓国の外国人移民問題はようやく1990年代以降に問題となっており、労働状況や居住環境など、この地区の現状を見ることで、韓国の新たな都市社会問題の存在を予感させられた。三か所目の訪問地であるポイ洞のビニルハウス(スクォッター)では、住民代表の説明から、権力側に左右された地区の形成過程を確認し、さらには住民当事者組織による居住権運動の一端に触れることができた。そして最後に訪問した杏堂洞住民自治センターとノンコル信用協同組合(コミュニティバンク)では、コミュニティ主導による都市開発のオルタナティブが行われており、日本での社会的条件不利地域の再生にとっても非常に示唆に富む事例であったことが認識された。

■ソウル市立大学都市人文学研究所と学術交流協定を締結

ソウル市立大学都市人文学研究所(http://english.uos.ac.kr/)との学術交流協定を締結するため、佐々木雅幸所長、水内俊雄、岡野浩、両副所長を始め都市研究プラザ関係者数名でソウル市立大学を訪問した(9月17日)。ソウル市立大学都市人文学研究所は、2007年から2017年まで Humanities in Korea Projectによる研究助成を受けて、“Humanistic Vision of Globalpolis”をテーマに人文学的視点からグローバルシティについての理論研究および都市問題に関する調査を主な活動内容としている研究機関である。協定締結の席には、Lee, Seong-Paik所長を始め6人の教員と都市研究プラザ関係者が同席し、和やかな雰囲気のもとでそれぞれの研究プロジェクトにおける取り組みや今後の研究の展開について情報交換を行った。今回の協定締結により双方の大学における研究連携体制が整備され、今後は、研究成果の交換や国際セミナー等を通じて研究者の交流を積極的に推進していく予定である。

調印を交わすLee所長(左)と佐々木所長(右)

■大韓住宅公社住宅都市研究院(HURI)共同学術セミナー

京畿道盆唐市に位置する大韓住宅公社住宅都市研究院(HURI、http://huri.jugong.co.kr/eng/index.asp)において学術セミナーが開催された(9月17日)。都市研究プラザからは稲田七海とコルナトウスキ・ヒエラルドが、それぞれ日本と香港におけるホームレス支援に関する研究報告を行い、HURIからも同研究所研究員のチェ・ウンフィ氏よる韓国の居住福祉政策についての報告が行われた。それぞれの報告後は、日韓を含む東アジアにおける「居住福祉」概念について意見交換がなされた。今回の学術セミナーを契機に、東アジアの大都市における居住福祉の推進のため、研究者どうしが緊密に連携を図りながら研究交流を活発に行い、共通認識を高めていくことの必要性を確認することができた。

■稲田七海(G-COE特別研究員)本岡拓哉(G-COE特別研究員)

大韓住宅公社における学術セミナーの様子

In April 2009,OCU-URP Sub-center was opened at Korean Center for City and Environment Research(KOCER), To commemorate this, the"Poverty and Renewal" symposium was held. At the symposium , not only were there analyses of the actual state of problems that accompany urban renewal, but also both theoretical and practical policy measures were proposed aimed at social inclusion and cultural creativity. In response to the various reports, there were vigorous questions and reactions, not only from researchers, but also from activists involved in carrying out local projects and from citizens who were among the approximately 50 participants who gathered, and it was an occasion for the presenters as well to have to consider new perspectives. Also, along with the symposium, a tour was conducted of poor localities, and participants were able to come into direct contact with the housing rights movement through the residents' organizations.

Additionally, in combination with the symposium commemorating the opening of the Seoul Sub-center, an academic exchange agreement was concluded with Seoul City University's Urban Humanities Research Institute, and a joint academic seminar was held with the Korean National Housing Corporation Housing & Urban Research Institute (HURI). 22 members from the URP participated, and research exchanges were planned for the promotion of future research link-ups.

By concluding this agreement, a liaison framework has been set up at both universities, and we plan to actively carry out research exchanges in the future.

At the Korean National Housing corporation & Urban Research Institute (HURI), an academic seminar was held on housing welfare and poverty. There are many points in common related to housing welfare problems in both Japan and Korea, and in the future we can look forward to even more advances in research exchanges as researchers simultaneously build closer liaisons.

特集２

ルーヴェン･カトリック大学･都市研究プラザ ジョイントワークショップ／スタディツアー

SPECIAL 2 A joint workshop by Leuven Catholic University (KUL) and OCU-URP and study tours

2009年9月1日（火）から9月5日（土）にかけて、都市研究プラザはルーヴェン・カトリック大学（以下KULと称する）地理学部の協力のもと、ベルギーにてワークショップとスタディツアーを行った。この訪問の目的は、KUL地理学部とのジョイントワークショップを開催し、都市再生や社会的排除についての意見交換を行うこと、そしてこうした主題がベルギーにおいて有するリアリティを探求するべく、ベルギー諸都市のスタディツアーを行うことであった。また*“City, Culture and Society”*のヨーロッパでの編集任務について詳しく説明することも重要な目的であった。大阪市立大学都市研究プラザからは、水内俊雄副所長、G-COE特別研究員のコルナトウスキ、熊谷、北川が参加した。中山徹氏（都市研究プラザ特別研究員／大阪府立大学人間社会学部教授）、日本最大のNPOの1つで、首都圏でホームレス支援を行っているS.S.S（Social Security Service）の小川卓也氏も参加した。

ルーヴェン･カトリック大学でのワークショップ

From September 1 through 5, the URP in cooperation with Leuven Catholic University (KUL) organized a workshop and several study tours in Belgium. The purpose of our visit was to convene a joint workshop with the KUL Geography Department, exchange opinions on urban regeneration and social exclusion, and visit several Belgian cities in order to explore how these issues manifest themselves in Belgium. Moreover, we elaborated on an editorial role for a European edition of *“City, Culture and Society”*.

The workshop was titled “Comparative Approaches to Urban Regeneration and Social Exclusion in Western Europe and East Asia,” and both parties did presentations on themes covering issues such as homelessness, immigration, the status of asylum seekers, and new community structures amidst gentrification processes.

Four study tours were conducted to Antwerp, Ghent, Brussels and Beringen. This gave us the opportunity to observe gentrification processes, neighborhood/community regeneration strategies, services for the homeless, immigrants and asylum seekers, and creative forms of art and social inclusion. In summary, our visit to Belgium was a great opportunity to apply a new approach to the dynamic status of East Asian cities, seen from the current conditions of Europe.

■ワークショップ

9月4日（金）に、ルーヴェン・カトリック大学で「西ヨーロッパと東アジアにおける都市再生と社会的排除の比較研究Comparative Approaches to Urban Regeneration and Social Exclusion in Western-Europe and East-Asia」と題したワークショップを行った。KULと都市研究プラザの双方から、これらの地域（大阪、東京、上海、ヘント、ブリュッセル、ランペドゥーザなど）における都市再生、あるいはホームレス、移民、日本ではそれほど社会的に認知された事象とはなっていない庇護申請者に関する社会的排除の現状と支援のあり方についての発表がなされた。またそこから、排除と貧困の重層性を理解する上では経済メカニズムの分析が重要であるという指摘や、コミュニティの概念を地区という範疇に区切ることの問題や、都市に包摂されるvillageという着想の是非などに関する質疑がなされ、非常に刺激的な意見交換が展開された。

Programme

Maarten Loopmans (Research Group Social and Economic Geography, K.U. Leuven) Fortress Flanders? Housing and Housing Rights for Asylum Seekers and Illegal Immigrants in Flanders.

Toshio Mizuuchi (URP, Osaka City U.) Historical Development of Urban Renewal for the Former Outcast Minority People and Areas in Japan

Stijn Oosterlynck (ASRO K.U. Leuven) Going beyond Physical Urban Planning Interventions: Fostering New Social Relations through Urban Renewal in Brugse Poort, Ghent

Mika Kumagai (URP, Osaka City U.) Spatial Analysis of Social Problems in Osaka, 1995-2005

Chris Kesteloot (Research Group Social and Economic Geography, K.U. Leuven) The Socio-spatial Structure of Brussels and Urban Dynamics: Suburbanisation, Gentrification, Urban Renewal and Exclusion

Geerhardt Kornatowski (URP, Osaka City U.) Homeless Issues in East-Asian Developed Countries: A Focus on “Socially Disadvantaged Areas” in Inner-city Districts

Takuya Ogawa (NPO Social Security Service) and Tohru Nakayama (Dpt. of Social Welfare, Osaka Prefecture U.) Housing Aid Activities for the Homeless by Non-profit Organizations in Japan: The Case of Tokyo

Shinya Kitagawa (URP, Osaka City U.) A Space for Tourism or for Immigration?: The Challenge Faced by the Island of Lampedusa to Become an Overlapping Space for the Euro-Mediterranean

Yannan Ding (K.U.Leuven) Immigration in Chinese Cities: Villages in Cities

■スタディツアー

初日の9月1日（火）は、アントウェルペン（オランダ語Antwerpen、フランス語Anvers、英語Antwerp）を訪れた。最初に世界的にその名が知られてきたダイヤモンド街の見学を行った。それから、メーイル通りMeirという巨大なショッピング・ストリートを歩きながら、都市の中心部へと進んでいった。その後は大聖堂と市庁舎を見学してから、街の新旧の顔が交差する古い港スヘルデScheldeを訪れて、最後に北に位置するいわゆる飾り窓地区Schipperskwartierを通って、鉄道駅の傍にあるチャイナタウンを見学した。

翌9月2日（水）は、ユネスコに創造都市として登録されているヘント（オランダ語Gent、フランス語Gant、英語Ghent）を訪れた。KULのステイン・オーステルリンクStijn Oosterlynck氏の案内を通じて、特に19世紀の工業地帯地域の都市再生の様子を伺うことができた。ヘントでは、比較的安価な住宅ストックが並んでいる「ブルージュ門Brugse Poort」に足を運んだ。かつて栄えた織物工業の労働者たちの住居であったが、その後長らく移民たちがそこに居住してきた。しかし、最近では比較的富裕な若いベルギー人たちがこの地域に関心を寄せはじめ、それに呼応して住宅価格が上昇しているのであった。オーステルリンク氏は、若い人たちは共同体でのまとまりのある生活を喚起させる本物らしい住宅群の雰囲気に魅力を感じているのだと述べていた。歩を進めるうちに、コミュニティの住民への支援が積極的に取り組まれているエリアに案内された。そこは最近設けられたという近隣センター、社会的包摂の活動に従事しているアート集団、中古の家具を売っている社会的企業などが集まる興味深いエリアであった。

ヘントでの2人のスペシャリストによる現地説明

9月3日（木）には、KULのブルーノ・メーウスBruno Meeus氏の案内で、ブリュッセル（フランス語Bruxelles、オランダ語Brussel、英語Brussels）を訪れた。はじめに、旧城壁内ペンタゴンの中心部から少々西部にあるジェントリフィケーションが進む地域の一画に位置するホームレスのドロップインセンターを見学した。そこではホームレスが（非登録の）移民でもありうる、（非登録の）移民がホームレスでもありうるという現代ヨーロッパ社会の趨勢を、社会と政治との重層的な関係性の一端を伺うことができた。その後は、ペンタゴンから西へ旧城壁を出たブリュッセルのインナーシティに入り、アンデルレヒトAnderlechtとモーレンベークMolenbeekへと向かった。これらの地域には、中古自動車販売に特化するセネガル人などの移民たちが多く居住している。また東接するモロッコ人街における移民コミュニティと、ホワイトベルギー人の新住居街区とのコンフリクトの現状に対する説明も受けた。

ブリュッセルのホームレスドロップインセンター内

最終日の9月5日（土）には、一部ミシェル・コルナトウスキ氏の案内によって、ベリンゲン（オランダ語・フランス語・英語ともBeringenと表記）というかつての炭坑都市に足を運んだ。移民の社会統合センターを訪れたが、そこでかつて炭坑労働者地区の「ゲットー化」と炭坑周辺で進行するジェントリフィケーションの傾向について伺うことができた。この傾向は「ゲットー化」には歯止めとなるが、一方で手頃な価格の住宅供給を維持・確保することが難しくなっているとのことである。

■評価

ベルギーの5日間では、コミュニティとしての近隣地区の再生、ホームレスや移民、庇護申請者への支援、そしてアートと社会的包摂の自律的・創造的節合のかたちなど、都市研究プラザの研究実践と非常に親和的な内容を通して、西ヨーロッパの現在の都市の姿を肌で感じ取ることができた。都市研究プラザが取り組んでいる課題が、世界のあちこちで共通して取り組まれる必要のあるグローバルな課題であることを確認すると同時に、こうしてヨーロッパなど世界の他地域から照射されることで、（東）アジア都市論が有する特異性もよりいっそう表出してくるに違いないという感触を得ることができた。

■ヒェラルド・コルナトウスキ（G-COE特別研究員）
北川眞也（G-COE特別研究員）

国際円座「近世身分社会の比較史」

'International Roundtable' (ENZA) "Comparative History of Early Modern Status Society"

2009年7月18日(土)19日(日)の両日、大阪市立大学高原記念館学友ホールを会場とし、「近世身分社会の比較史」をテーマに「国際円座」が開催された(G-COE都市論ユニット、大阪市立大学文学研究科重点研究、近世大坂研究会、ぐるーぷ・とらっど３共催)。近年、日本における身分的周縁研究の進展により、社会集団の具体的な実態や集団相互の関係構造の解明が深化しつつある。こうした細部・深部から全体を見据える視座はフランス史などにおいて蓄積されつつある。くわえて、英語圏の日本史研究の一部で行われている近代化・帝国主義化論を捉え直す視座は、日本史研究そのものを見つめ直すことを要請している。そこで本円座では、日本の身分社会について、中国、朝鮮社会、インド社会などを参照とし、国際的な視座も含め比較史的に議論することを狙って開催した。「円座」という聞き慣れない形式は、巷のシンポジウムとは一線を画し、司会・報告者・パネリスト間で実のある討論を行い、それを通じて新たな研究方法を共同で発見・構築することを狙って設定した。両日を通じた参加者は国内外の研究者50人にのぼり、会場はほぼ満席となった。

司会は森下徹氏(山口大学教授)が務めた。初日は事例報告が７本行われた。まず塚田孝(文学研究科教授)が問題提起報告として、19世紀大坂の非人集団について垣外仲間の弟子層の実態を紹介した。つづいて井上徹(文学研究科教授)は、明代末の都市広州を対象に、経済格差の拡大による都市行政制度の変容のなかで、地域支配者としての郷紳や無頼が下層民衆にとっていかなる存在であったのかを論じた。マーレン・エーラス氏(プリンストン大学院生)は、越前大野藩による乞食・浮浪者に対する救済が、非人集団の御用に依存することで実現されていたことなどを指摘した。三田智子(G-COE特別研究員)は、竹皮問屋・仲買・雪駄商人や雪駄表を生産する小前層ら相互の関係と展開について、19世紀泉州南王子村の村落構造のなかに位置づけた。竹ノ内雅人氏(飯田市歴史研究所)は、江戸の下層宗教者集団の実態について移住政策前後のあり様を把握した。及川将基氏(立教大学院生)は捕鯨を行う鯨組組織の実態を、周辺村々や領主権力、市場などを絡めた社会総体のなかで捉えることを試みた。中谷惣(G-COE特別研究員)は、トスカーナの都市ルッカに残された14世紀前半の民事裁判記録に検討を加え、法的「貧民」カテゴリーと実体としての貧民とのズレを指摘した。

二日目は、総合討論にむけた問題提起として中国・朝鮮・インド・日本史研究の立場からコメントが行われた。岸本美緒氏(お茶の水女子大学)は、身分的周縁論が目指す方向性について質疑を加え、流動的な社会である中国明・清期と社会集団を基盤とする日本とは身分のあり方が異なっていること、人々の事実上の社会関係から身分制度を考えるアプローチの重要性を述べた。デビット・ハウエル氏(プリンストン大学)は、近世朝鮮では法的には奴隷として位置づけられる存在が、生活・労働の局面では「自由」な場合があったのに対し、日本近世村落では法的に百姓でありながら隷属する被官を比較し、都市だけでなく村落も含めた身分社会の比較が必要であると指摘した。ダニエル・ボツマン氏(ノースカロライナ大学)は、英国のインド植民地支配の拠点都市が近世城下町と近似的な様相を見せること、本来「ゆるやかな」インドのカースト制度が英国の植民地支配によって硬直するという見方を紹介し、身分社会を比較する際に植民地主義との関係を考慮すべきことを指摘した。吉田伸之氏(東京大学)は、大山喬平氏(立命館大学COE推進機構教授:日本中世史)が「ゆるやかなカースト社会」として論じた労働の歴史的・儀礼的価値の相違の指摘を評価する一方、所有論、とくに「生きた労働力能」の所有形態からの整理が必要であると指摘し、身分社会を比較史的に把握するうえでの視座を述べた。

午後は、大山氏・鈴木良氏(元立命館大学教授:日本近代史)が加わり、「円座」を組んで討論を行った。各報告や討論の内容は近く刊行される予定であり詳細はそれを参照されたい。二日間の限られた短い時間ではあったが、国内外の、時代の枠組みを越えた研究者が一同に会し、しかも精緻な個別実証研究報告とそれぞれの視座に基づいた身分社会論に関する討論は、今後「身分社会の比較史」の構築へ向かう重要な出発点になった。

■山下聡一(G-COE特別研究員)

「円座」による討論

On July 18 and 19 (Sat. and Sun.) 2009 an 'International Roundtable' (ENZA) on the topic of "Comparative History of Early Modern Status Society" was held at the Friendship Hall of Osaka City University's Takahara Commemorative Hall. Discussions were held on early modern Japan's status society, with comparisons drawn to Chinese, Korean, and Indian societies. The unfamiliar format of the ENZA roundtable, an arena symposium, was contrived, delineating a single line, with the intention of having substantive debate between the presenters and panelists and having them construct together new research methods. As many as 50 researchers from both Japan and abroad participated, and the meeting hall was filled to capacity. The researchers, transcending the boundaries of historical period, all met together, and the detailed individual testimonies in the research reports, and the Status Society Theory that were based on their viewpoints, formed an important point of departure towards constructing a 'comparative history of status societies'.

現場プラザ短信1

豊崎プラザ　大阪らしい長屋と路地の再生実験

長屋改修の完成を祝って　―学長見学とお匙の日

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を柱に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。

2年間にわたる主屋と長屋の改修工事が4月に完成した。外観は登録文化財にふさわしい伝統様式、内部は現代生活にあわせた装いに一新された。長屋にはもとの居住者が戻り、設計に関わった大阪市立大学の学生が新たに入居した。豊崎プラザ最大のプロジェクトが1つの節目を迎えた。

６月のある日、豊崎プラザの所有者と金児暁嗣学長、都市研究プラザの佐々木所長、長屋改修に関わった生活科学研究科の教員が集い、改修プロジェクトの完成を祝った。みごとに蘇った長屋を見学した学長は、大学の地域貢献による成果を実感した様子だった。

生駒時計店作のお匙

所有者の方から全員に銀の匙のプレゼントがあった。この匙は、亡きご当主が勤め先から贈られたもので、生駒時計店(建物は登録文化財)の特製品である。歴史ある建築の保全を進めるこのプロジェクトにとって、とても意味ある贈り物で、この日を「お匙の日」にしようと盛り上がった。

改修長屋の1軒は研究科の研究室が賃貸し、長屋住まいの体験を行っている。居住者の目線による情報を発信する場として、今後のプロジェクトの中心となっていくだろう。

■綱本 琴(豊崎プラザRA)

現場プラザ短信2

和泉プラザ　「地域の歴史的総合調査」の取り組み

2009年度和泉市合同調査―和泉市納花町―

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会で、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。

2009年9月28日(月)～30日(水)、和泉市納花町を対象に和泉市合同調査を実施した。大阪市立大学日本史研究室の学部生・院生を中心に、OB・教員・和泉市史編さん室などから、計53名が調査に参加した。調査当日は5つの班に分かれ、地域に残る古文書の調査、地元の方々からの聞き取り調査、現地踏査などを行い、時代を超える地域の生活構築の歴史をあらゆる側面から考察することをめざした。また最終日には、納花町民会館において町会の方々を招き3日間の調査報告会を開いた。

地元町会の全面的な協力により、集落と山の関係や水利を中心に、これまで明らかにされていなかった納花の歴史と現在の状況が明らかになってきた。今年の合同調査の成果をもとに、『市大日本史』13号(2010年5月刊行予定)に報告書を掲載する。

■久角健二(和泉プラザRA)

聞き取り調査風景

現場プラザ短信3

扇町プラザ　クリエイティブな都市型産業の原動力をフォローアップ

クリエイティブクラスが働きやすい都心再生を探る

印刷・放送・広告関連産業から派生した企業やクリエーターにより、創造産業集積が形成されている扇町地区。この扇町プラザでは、同じビルに立地する大阪市の創造産業インキュベーター「mebic扇町」との連携などにより、大阪ならではの人のつながりを大事にした創造産業の発展を、実践的研究を通じて支援しています。

「デザインイースト00」でのシンポジウム
(中央＝佐々木雅幸(都市研究プラザ所長))

2009年秋、「デザインイースト00」など様々な創造産業振興に向けたイベントが民間主導や行政とのパートナーシップで新たに大阪から生まれ始めている。これら大阪独自の創造産業の盛り上げの気運を支援するため、大阪市経済局は「クリエイティブストリームオオサカ」という創造産業のブランディングキャンペーンを9月より開始している。

扇町プラザは「大阪地場の担い手が活きる創造産業クラスターの形成」をテーマに、「クリエイティブストリームオオサカ」に到るコンセプトの形成や、イベントの開催を実現できる、デザイン分野を中心とする担い手間のネットワークづくりに向けた支援を通じて、2008年秋以降バックアップを続けてきた。

今後、「ぺちゃくちゃ大阪」など様々なクリエイティブ分野の担い手が交流できるプラットフォーム形成促進企画を扇町プラザから「クリエイティブストリーム」に投入することで、気運だけで終わらない流れづくりに取り組んで行きたい。

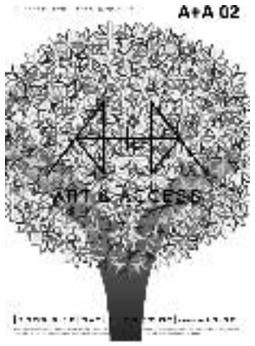
■岡田智博(扇町プラザRA)

第2回アート＆アクセスシンポジウム「釜ヶ崎のアートへ」

the Second Art and Access Symposium, "Exploring Kamagasaki" through the Arts

2009年9月12日(土)、アート＆アクセス第2回シンポジウム「釜ヶ崎のアートへ」が、都市研究プラザ所長の佐々木雅幸が委員長を務める地域アートマネージャー育成事業実行委員会の主催により西成プラザにて開催された。本シンポジウムは今年5月から同委員会で行っている「地域のためのアートマネジメント講座」の一環であり、2008年3月の第１回に続いてアートとコミュニティ/アートのアクセシビリティに注目し、今年は釜ヶ崎を舞台とした。

午前の「釜トーク」では、若松司(G-COE特別研究員)と山田英範氏(ビジネスホテル中央グループ専務取締役)によるレクチャーが行われ、釜ヶ崎とそのイメージが形成された経緯および現状が概括され、釜ヶ崎のアクセシビリティを高めるために行われている最近の活動も紹介された。



シンポジウムの広報チラシ

午後の部は栗原彬氏(立教大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授)の基調講演からはじまり、負の記憶の表現とつながり・コニュニケーションの窓口としてのアートのあり方について語られた。その後、釜ヶ崎で実際に活動している12団体が各々10分間のプレゼンテーションを行い、現場の生き生きした声が約30名の参加者に届けられた。

そしてフリーディスカッションでは、全ての関係者－研究者、住民、支援者、学生など－が一緒に話し合い語り場を作る文化と、そのつながりから生じる公共性の価値を、心理的に遠い存在だった釜ヶ崎に接してより実感できたといえよう。 ■全ウンフィ(第2ユニットRA)

団体プレゼンテーションの様子

On September 12 (Sat.) 2009, the Second Art and Access Symposium, "Kamagasaki and the Arts", was held. This symposium focuses on the arts and community and the arts and accessibility, and this year it spotlighted Kamagasaki and its artistic activities. Proceeding through lectures and free discussion, concerned individuals and participants talked about how to make Kamagasaki more accessible through arts-related activities and what kinds of art could help share memories of Kamagasaki that transcend its existing image.

船場アートカフェ 芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合／媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

船場センタービル ミュージアム in 船場まつり

2009年9月14日(月)から21日(月・祝)まで、船場アートカフェでは船場センタービル5号館2階にて「船場センタービル ミュージアム」を開催しました。中船場の4つの商業団体による街の活性化を目的としたイベント「船場まつり」の一環として企画され、来年40周年を迎える船場センタービル建設当時の貴重な写真や映像などを多数展示し、延べ855人が来場しました。

特に来場者の注目を集めたのが、ビルが完成するまでを記録した16ミリフィルムです。映像には、全長930mという全国的にも珍しい巨大建造物に関わった当時の人々の想いや、オープン当初の繊維卸店を中心とした活気溢れるビルの様子なども収められ、船場の現在と未来を考える上で大きな反響を呼びました。

また、会場では映像活動ユニットVIDEO ROMANTICAによる映像作品を展示したほか、聴覚や触覚といったさまざまな感覚をテーマとしたまちあるき「船場ウォーク」(6回)を同時開催し、アートの視点から都市の魅力を再発見する試みを行いました。

■石川 優(船場アートカフェRA)

会場の様子

現場プラザ短信4

連環型地域産業政策シンポジウム

―大阪圏集積をパワーアップする―

Symposium :
New Perspective on Regional Industrial Policy :
Towards Regeneration of Industrial Clusters in the Osaka Metropolitan Area

2009年9月4日(金)午後1:30～5:30、「大阪市立大学大都市圏産業政策研究会」(世話人：立見淳哉(創造都市研究科准教授)、本多哲夫(経営学研究科准教授)、長尾謙吉(経済学研究科准教授))は都市研究プラザにおいて「連環型地域産業政策シンポジウム～大阪圏集積をパワーアップする～」を開催した(共催：都市研究プラザ)。「連環型」とは、大阪大都市圏の産業集積を１つの有機的なまとまりとしてとらえ、農・工・商・サービス業といった産業間の「連環」、およびそれらを支援する行政・経済団体間の「連環」をつくることによって、大阪大都市圏に集積する産業活力を引き出そうとする視点である。

シンポジウムとポスターセッションで構成されたこの集いには、行政職員と研究者を中心に65人が参加し、自治体が実施している産業政策の実態や課題、それを踏まえたトータルビジョンづくりに向けた動き等について、熱心な討論と交流をくり広げた。

また、今回のポスターセッションで産業政策の実績を発表したのは尼崎市、大阪市経済局、大阪市西淀川区、高槻市、大東市、東大阪市、八尾市、堺市、岸和田市、大阪府の10自治体であったが、発表者はもとより、多くの参加者がこうした「場」による人とアイディアの交流の必要性を語っていた。

大阪大都市圏では、ここ2～3年、工業を重視する自治体が増え、政策の交流・連携を求める気運が圏域的に生まれている。その意味でタイムリーな取組になったといえよう。今後、大学発の産官学連携として3年計画の研究を行い、大都市圏における連環型産業政策の方向をまとめる予定である。

■三浦純一(都市研究プラザ研究員)

ポスターを前に交流するポスターセッション参加者

A symposium entitled "New Perspectives on Regional Industrial Policy: Towards Regeneration of Industrial Clusters in the Osaka Metropolitan Area" was held on September 4, 2009, at the Sugimoto Campus of Osaka City University. Recently local governments in the area have rediscovered the role of manufacturing industries in the regional economy. So far, however, government action has concentrated on intra-sector issues rather than on inter-sector synergies. University professors and government officials discussed policy dilemmas and searched for a new kind of effective policy.

海外サブセンター便り from Yogyakarta

URP Yogyakarta Sub-Center Activities 2009

ジョグジャカルタ・サブセンター

The 7th Academic Forum on Socio-cultural Networking was held at the URP Yogyakarta Sub-center in February 2009. The forthcoming 8th forum is scheduled to be held in February 2010 on the theme of Solving Social Problems through Arts and Cultural Activities. There are also some plans for the URP Yogyakarta Sub-center:

- A general seminar on urban culture studies by under graduate students
- An urban culture studies writing contest for graduate students. The winner will be presented in our annual academic forum
- URP Yogyakarta website redesign
- Uploading of URP seminar papers onto the web

■Erwin

Universitas Gadjah Mada

ジョグジャカルタ・サブセンターでは、2009年2月に「Socio-cultural Networking」をテーマに第7回ジョグジャカルタ・アカデミックフォーラムを開催した。次回(第8回)は2010年2月開催予定で、「To Solve Social Problem through Arts and Cultural Activities」をテーマとすることが決定された。 その他、今後、大学生らによる都市文化研究に関する総合的なセミナーや、大学院生による都市文化研究論文コンテストの開催とその優勝者のアカデミックフォーラムでの発表、ウェブの再構築やURPセミナー報告のウェブジャーナルとしての掲載を行いたいと考えている。

もうひとつの「水都大阪2009」龍王宮プロジェクト祝祭

'Celebration of Ryuoukyu'

こりあんコミュニティ研究会は、2009年3月発足当時から、重要な研究対象地域として、大阪在住の済州島出身者の文化的・宗教的拠点であったJR桜ノ宮駅近くの龍王宮を調査、研究しているが、この場所は不法占拠地域として近く行政によって撤去を余儀なくされている。撤去される前に、できるだけ龍王宮の歴史やその意味を記録、記憶しようと、こりあんコミュニティ研究会では、毎月その場所で定例研究会を開催しながら、その場所の価値を周知のものにしていこうと活動しているが、さらに多くの方々に知ってもらうために、龍王宮祝祭準備チーム（都市研究プラザ全泓奎准教授、神戸女学院大学非常勤講師の藤井幸之助氏、G-COE特別研究員の本岡拓哉、宮下良子、都市研究プラザ研究員の黒木宏一）を結成し、2009年8月22日（土）に龍王宮祝祭を開催した。

当日のプログラムの第１部は、大阪リバーサイドホテルに於いて、朴保氏のミニライブと「大阪の済州人（チェジュサラム）と龍王宮」にまつわるリレートークが行われた。特に、「水辺のクッ―龍王宮・箱作・済州島」－飯田剛史氏（大谷大学教授）、「大阪の済州人（チェジュサラム）の祈り」－高正子氏（神戸大学非常勤講師）、「在日二世から見た、済州人出身一世の習俗の断片」－玄善允氏（関西学院大学非常勤講師）、「私は『シンバン』の祭礼を受けた。」－金時鐘氏（詩人）のリレートークでは、それぞれのテーマに関する思いが語られ、客席からも活発な意見が発せられた。既に新聞等で広報されていた龍王宮祝祭に関する記事を読み、急遽参加したという一般の女性や、子供連れの男性の姿もあり、さまざまな層の人々の関心が龍王宮に寄せられているという現状が窺い知れた。

また、第2部では、参加者全員で、龍王宮のフィールドワークを行い、第3部では、毛馬桜ノ宮公園に於いて、中川眞（都市研究プラザ兼任研究員／文学研究科教授）が主宰する「マルガサリ」（ガムラン合奏団）の演奏を中心とした野外ライブが実演された。そのマルガサリの演奏とコラボレーションした詩の朗読、ジャワやタイの舞踏は、空間を超越した静寂さを象徴していたが、朴実氏（京都・東九条CANフォーラム）のアクセントのある独特のリズムのチャング（韓国の打楽器）が加わると、いつの間にか広場の中心には、参加者の踊りの輪ができていた。

■宮下良子（G-COE特別研究員）

毛馬桜ノ宮公園での野外ライブ

大阪リバーサイドホテルでのリレートーク

Since its inception in March 2009, the Korean Community Studies Group has been surveying and researching the Ryuoukyu (Dragon King Palace) near the JR Sakuranomiya Station that was the cultural and religious center for immigrants from Jeju Island who were living in Osaka. In order to record and remember its history and have it more widely known, a 'Celebration of Ryuoukyu' was held on Saturday, August 22. The first part of the program was a mini-live performance and relay talk at the Osaka Riverside Hotel, the second part consisted of field work at the Ryuoukyu, and the third part was an outdoor performance held at Kema Sakuranomiya Park. While this 'Celebration of Ryuoukyu' was a first experiment, to what extent the results of having obtained the cooperation of many supporters and volunteer staff will feed back into a shared multicultural society is an important issue for the future.

現場プラザ短信5

西成プラザ　生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が集積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。

西成発！ 居住サポート研究会

西成プラザのある西成区は、高齢者、障がい者をはじめ、ひとり親家庭や野宿生活者等の住宅困窮者が数多く存在し、また、老朽住宅や最低居住水準未満世帯の比率が市の平均を大きく上回る等、住宅事情も劣悪です。しかし、近年は、行政においても安心して住み続けることができるまちづくりに向け、住宅部局と福祉部局の連携による居住支援政策が進められています。

西成プラザと連携のある、西成区北西部を拠点に活動するNPO法人ソーシャル・インクルージョン（SI）協会が、2009年度大阪市市民活動推進基金助成事業に「住宅困窮者居住サポート事業」を提案し、採択されたことから、5月に水内（都市研究プラザ教授）を座長、全（都市研究プラザ准教授）を副座長とし、さらに、佐藤（特任教員）、米野（都市研究プラザ博士研究員）、葛西、稲田、若松（G-COE特別研究員）とSI協会、地域活動家により「西成居住サポート研究会」を立ち上げ、9月より西成プラザRA平川も加わり主に第3ユニット構成員が中心となって進めています。

福祉×建築×地域という3方向からの議論を重ね、現在は地域の住宅事情の把握に向け、宅建業者へのヒアリングを開始したところです。今後は、これまで見えなかった住宅供給側への調査を行い西成区の住宅ニーズや住宅流通の仕組みを解明しながら、「西成において誰もが安心して住み続けることができる支援のあり方」を模索していきます。

■蓬莱梨乃（西成プラザRA）

火災延焼の危険性が高い密集市街地

現場プラザ短信6

ストリートワイズ・オペラ

2009年8月29日（土）、30日（日）西成プラザに、イギリスからストリートワイズ・オペラ（以下、SO）のスタッフ、釜ヶ崎で紙芝居劇を展開するむすびのメンバー、アートやまちづくりに関心のある市民などが集まった。イギリスでオペラを通じてホームレス支援をするSOによるワークショップ（以下、WS）や講座が開かれた。8月31日（月）には、水都大阪2009 中之島公園 文化座劇場で、アートの価値や領域を考え、市民、自治体、企業、大学などとの協働をさぐるシンポジウムを開催。紙芝居劇むすびがWSを通じて形にした新作の発表も行われた。

この一連の取り組みは、都市研究プラザをはじめ、ブリティッシュ・カウンシル、NPO法人ココルームなどの多様な主体によってつむがれる。中でも、アート団体SOに視線が注がれた。代表のマット・ピーコック氏による講演では、質の高い表現活動こそが、社会に対する自信や関係を取り戻す大きな契機となることが紹介される。WSでは、プロの作曲家やオペラ歌手を交え、むすびのメンバーを中心に参加者全員で歌や振り付けを作り上げていく。さらに人材育成にも力をいれる。WSの手法を学ぶ講座も開かれた。

日本ではまだまだ未開拓といえる、社会的に排除を受けた人たちとの協働の場づくりを、イギリスの事例から学ぶ機会となった。研究・学習・実践が連続的に行われた今回の取り組みを通じ、より広く市民に社会包摂あるいは文化創造の可能性を感じさせるものとなった。

■平川隆啓（西成プラザRA）

現場プラザ短信7

阿倍野プラザ　近代長屋を活用した居住支援プロジェクト

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。

第一回阿倍野Religion-Caféの報告

2009年8月25日（火）、川浪剛氏が発起人となり、阿倍野プラザで、第一回阿倍野Religion-Caféが開催された。このReligion-Caféは、堅苦しい説法ではなく、おもしろい切り口の宗教のお話で、阿倍野にあるCafeのお茶やスイーツを楽しみながら、気軽に宗教に接してもらおうという狙いがある。今回は、浄土真宗大谷派三波冥寺住職・戸次公正氏をお迎えした。

戸次氏は、日本人には難解な漢文をそのまま朗読した読経ではなく、仏教の教えを日本語で分かりやすく説くという活動をされている。その取り組みについて、さまざまなエピソードを織り交ぜながらお話された。

講演後のCaféでは、参加者が思い思いに宗教について語り合い、「宗教をとても身近に感じることができた」「宗教に対する考え方が変わった」といった感想が聞かれた。

■黒木宏一（都市研究プラザ研究員）

宗教について語らう参加者たち